





萬曆五年日記

正序

一、海二等付也。三、五付。西北院  
前占よりありし。只玉置付也。

象中有力之年取此信人

卷之四  
中少得少得三書自兩小卯年

人未也。爲之自。馬力中。明。天。一。百。五。十。  
明。之。不。可。也。心。何。有。竹。在。於。少。明。但。

一、五月、余、冬、下、雨、日、終、

善之教成於一信於也

天章閣殿試上卷

卷之六

此卷之末

延亨世系  
左系孫子

此後以爲

丁巳年九月

丁巳年







丹尾三郎  
石見守  
水堀山守  
伊豆守  
市村守  
後庄守  
三河守  
西段守  
今川守  
細川守  
佐々木守

丹尾三郎  
石見守  
水堀山守  
伊豆守  
市村守  
後庄守  
三河守  
西段守  
今川守  
細川守  
佐々木守

十三

今川守  
細川守  
佐々木守  
伊豆守  
市村守  
後庄守  
三河守  
西段守  
今川守  
細川守  
佐々木守

伊豆守

伊豆守

市村守

市村守

後庄守

後庄守

三河守

西段守

西段守



夢のうき  
ふかひを

夢の外に二巻  
十九り

半外三  
十

一白七十三万  
 三万五千五百

山石火中

萬年古物一

昔年秋

米の白くありては

物系ハ山崎

米 九十九石  
 口 二石  
 口 二石

多田孝三郎

百十号 凡各一五

六五

小島而世古く名聞を  
 著し一帯に強ひて供す

西遊記

すゑに子方、片名六を  
せり。三つは  
す。

2222

萬曆二十九年  
正月

4

三十三卷

卷之四

萬石無多  
足名一石

下回七三

萬百廿四 足名十五分

平五三  
池田一  
二一

書而不字可名其書

口  
子  
大  
印

高切二系  
口部  
之

三

古今集十

4

二月廿七日

萬民之望

三

三月十日

This image shows a blank, aged, cream-colored page, likely an endpaper or flyleaf of a book. The paper has a slightly textured appearance with some faint smudges and discoloration, characteristic of old paper. The left edge of the page shows the binding of the book.



明治十七年  
八月二十日 辰巳  
抄本 永年一

明治十七年  
八月二十日 辰巳  
福多 永年一

明治十七年  
八月二十日 辰巳  
吉田 永年一

明治十七年  
八月二十日 辰巳  
吉田 永年一

明治十七年  
八月二十日 辰巳  
吉田 永年一

明治十七年  
八月二十日 辰巳  
吉田 永年一

明治十七年  
八月二十日 辰巳  
吉田 永年一

明治十七年  
八月二十日 辰巳  
吉田 永年一

明治十七年  
八月二十日 辰巳  
吉田 永年一

明治十七年  
八月二十日 辰巳  
吉田 永年一

明治十七年  
八月二十日 辰巳  
吉田 永年一

明治十七年  
八月二十日 辰巳  
吉田 永年一

明治十七年  
八月二十日 辰巳  
吉田 永年一

明治十七年  
八月二十日 辰巳  
吉田 永年一

明治十七年  
八月二十日 辰巳  
吉田 永年一

明治十七年  
八月二十日 辰巳  
吉田 永年一

明治十七年  
八月二十日 辰巳  
吉田 永年一







序

二月廿

二  
四  
五

二月廿四日

五言古詩  
五言古詩

日  
二  
十  
五

嫡女

宜安縣

丁未年

十  
卷  
之  
一



















同日是日午後五時在井原尾田近海に  
月三十日

廿二日

一ノノ山向に去る

廿三日

一ノノ山向に去る。午後五時在井原尾田近海に  
月三十日

一ノノ山向に去る

廿四日

一ノノ山向に去る。午後五時在井原尾田近海に

廿五日

一ノノ山向に去る。午後五時在井原尾田近海に

廿六日

一ノノ山向に去る

廿七日

一ノノ山向に去る。午後五時在井原尾田近海に  
月三十日

一ノノ山向に去る。午後五時在井原尾田近海に

一ノノ山向に去る。午後五時在井原尾田近海に

一ノノ山向に去る。午後五時在井原尾田近海に

一ノノ山向に去る

廿八日

一ノノ山向に去る。午後五時在井原尾田近海に

一ノノ山向に去る。午後五時在井原尾田近海に

一ノノ山向に去る。午後五時在井原尾田近海に

一ノノ山向に去る。午後五時在井原尾田近海に

一ノノ山向に去る。午後五時在井原尾田近海に

一ノノ山向に去る。午後五時在井原尾田近海に

一ノノ山向に去る。午後五時在井原尾田近海に

一ノノ山向に去る。午後五時在井原尾田近海に

一ノノ山向に去る。午後五時在井原尾田近海に

一ノノ山向に去る。午後五時在井原尾田近海に











仕屋中へ来たるは所々同様に外中  
に一々解け 昔の如き年ふふに  
し新装は此より 何れか不意  
ふふに不意ふふに 何れか不意  
思ふに 何れか不意 何れか不意  
何れか不意 何れか不意 何れか不意

葉張あち

成り果てた南村 何れか不意 何れか不意  
送中へ来たるは所々同様に外中  
に一々解け 昔の如き年ふふに  
し新装は此より 何れか不意  
ふふに不意ふふに 何れか不意  
思ふに 何れか不意 何れか不意  
何れか不意 何れか不意 何れか不意

七月廿二日

一々解け 昔の如き年ふふに  
し新装は此より 何れか不意  
ふふに不意ふふに 何れか不意  
思ふに 何れか不意 何れか不意  
何れか不意 何れか不意 何れか不意

七月廿三日

一々解け 昔の如き年ふふに  
し新装は此より 何れか不意  
ふふに不意ふふに 何れか不意  
思ふに 何れか不意 何れか不意  
何れか不意 何れか不意 何れか不意











以根在平と云ふ力は通に云ふより  
五封を云ふ、水不云ふ中、石田印也  
と云ふ云々、其の如く、銘一、  
其の如く、其の如く、内多、  
七、其の如く、其の如く、其の如く、  
其の如く、其の如く、其の如く、

七、其の如く

十七、其の如く、水不云ふ中、  
其の如く、其の如く、

其の如く、其の如く、其の如く、  
其の如く、其の如く、其の如く、  
其の如く、其の如く、其の如く、  
其の如く、其の如く、其の如く、

一、其の如く、其の如く、

其の如く、其の如く、其の如く、  
其の如く、其の如く、其の如く、  
其の如く、其の如く、其の如く、

其の如く

山、其の如く、母

其の如く、其の如く、其の如く、  
其の如く、其の如く、其の如く、  
其の如く、其の如く、其の如く、  
其の如く、其の如く、其の如く、

一、其の如く、其の如く、

其の如く、其の如く、其の如く、  
其の如く、其の如く、其の如く、  
其の如く、其の如く、其の如く、

一、其の如く、其の如く、

其の如く、其の如く、其の如く、  
其の如く、其の如く、其の如く、  
其の如く、其の如く、其の如く、



一 寄 仙 舟 一 切 舟 船  
舟 十 万 艘 船

一 寄 舟 十 万 艘 船 舟 船 三 万 二 千 艘 船  
舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船  
舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船

一 寄 舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船  
舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船  
舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船

一 寄 舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船  
舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船  
舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船

一 寄 舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船  
舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船  
舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船

一 寄 舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船  
舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船

一 寄 舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船  
舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船  
舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船

一 寄 舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船  
舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船  
舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船

一 寄 舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船  
舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船  
舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船

一 寄 舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船  
舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船  
舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船 舟 十 万 艘 船



三節  
一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

一月十六日 丁亥

月十七日  
月十八日

萬千有而天

月亦々  
快哉

いふ事なり

いふ事言ておれ

一 今月西北より雨降る

尺 中 北 之 出 子 子 子 子 子

[illegible]

卷之五

江表故少府人子平爲之

死今之世者事也。而所為者善也。

[illegible]

此乃不人之

萬十の歌水と横成野のりく

女之修其德也

諸君、  
一、  
二、  
三、  
四、  
五、  
六、  
七、  
八、  
九、  
十、

作有るを以て、所修之抄

方物亦多矣 多矣 印之 之 在

[illegible]

海東先生

月夜書

卷之五

卷之四

一之何能去也

[illegible]

西がうあはれ此のこころ

牛し 端はくう、長八、軍、子、の、海、を

ハ  
本  
の  
う  
り  
  
こ  
い  
二  
三  
二  
一  
と  
ん  
が  
  
さ  
る  
の  
ま  
た  
は  
す  
て  
ら  
れ  
る  
の  
を  
し  
め  
し  
め  
る



しるはるゝこりせにふりて

市めろ

あろ

九月六

一々 船の客を乗せ

九月三

九月二

一四 正に客を乗せ 船の客を乗せ

九月一 正に客を乗せ 船の客を乗せ

八月三十一 正に客を乗せ 船の客を乗せ

八月三十 正に客を乗せ 船の客を乗せ

八月二十九

八月二十八

八月二十七

八月二十六 正に客を乗せ 船の客を乗せ

八月二十五 正に客を乗せ 船の客を乗せ

八月二十四 正に客を乗せ 船の客を乗せ

八月二十三 正に客を乗せ 船の客を乗せ

九月 九月

九月 九月

九月 九月

九月 九月

九月 九月

九月 九月

九月 九月

九月 九月

九月 九月

九月 九月

九月 九月

九月 九月

九月 九月



嘉永六年七月廿一日 辰日 禁里西北角  
二現ル

當年十一月晦



光緒三十三年

九百四十五

九月下 知縣

書自左下至右

二十  
後丹  
拔

高不

此乃子所使後至  
傳付於

抄本其公手書也

二月廿七日

詩之為物也。行乎

從之能之師矣  
後世少其人

一海木上

市乃如此  
以對

永系虛中

九月廿三日晴

一  
新  
之  
子  
子  
中  
如  
之  
止  
亦  
其  
之  
心  
也

九月十四日晴  
乙亥年  
三念米

一、今日之世，乃為我之世，我之世，乃為我之世。

保赤堂

多事少知幼觀多解

為多所憂  
憂其不  
能成也  
故曰  
憂其不  
能成也

世子出是世之人也

月夜の光を  
 照らす

卷之四

子之問也



九月十日 晴

一 五時より六時 飯後山歩き 高き山あり  
十一時より十二時 山歩き 山頂より下りて  
山麓にありてあり

一 六時より七時 山歩き 山頂より下りて  
山麓にありてあり

九月十日 晴

九月十日 晴

一 五時より六時 飯後山歩き 高き山あり

九月十日 晴

神田山歩き

一 五時より六時 飯後山歩き 高き山あり

一 六時より七時 山歩き 山頂より下りて

一 七時より八時 山歩き 山頂より下りて

一 八時より九時 山歩き 山頂より下りて

九月十日 晴

九月十日 晴

一 五時より六時 飯後山歩き 高き山あり

一 六時より七時 山歩き 山頂より下りて

九月十日 晴

一 五時より六時 飯後山歩き 高き山あり

一 六時より七時 山歩き 山頂より下りて

九月十日 晴

九月十日 晴

一 五時より六時 飯後山歩き 高き山あり

一 六時より七時 山歩き 山頂より下りて

一 七時より八時 山歩き 山頂より下りて

一 八時より九時 山歩き 山頂より下りて

九月十日 晴



九月廿五日

一 秋分 午前九時 晴 風 涼 雨 降 止 後

午後一時 雨 降 止 後

一 午後一時 雨 降 止 後

午後一時 雨 降 止 後

午後一時 雨 降 止 後

午後一時 雨 降 止 後

午後一時 雨 降 止 後

午後一時 雨 降 止 後

午後一時 雨 降 止 後

午後一時 雨 降 止 後

午後一時 雨 降 止 後

午後一時 雨 降 止 後

午後一時 雨 降 止 後

午後一時 雨 降 止 後

一 午後一時 雨 降 止 後

午後一時 雨 降 止 後

午後一時 雨 降 止 後

午後一時 雨 降 止 後

午後一時 雨 降 止 後

午後一時 雨 降 止 後

午後一時 雨 降 止 後

午後一時 雨 降 止 後

午後一時 雨 降 止 後

午後一時 雨 降 止 後

午後一時 雨 降 止 後

午後一時 雨 降 止 後

午後一時 雨 降 止 後

午後一時 雨 降 止 後

午後一時 雨 降 止 後

午後一時 雨 降 止 後











十月十二日 三ヶ所へ出立 寺へ参詣

十月十三日 寺へ参詣 山へ出立

十月十四日 寺へ参詣 山へ出立

十月十五日 寺へ参詣 山へ出立

十月十六日 寺へ参詣 山へ出立

十月十七日 寺へ参詣 山へ出立

十月十八日 寺へ参詣 山へ出立

十月十九日 寺へ参詣 山へ出立

十月二十日 寺へ参詣 山へ出立

十月二十一日 寺へ参詣 山へ出立

十月二十二日 寺へ参詣 山へ出立

十月二十三日 寺へ参詣 山へ出立

十月二十四日 寺へ参詣 山へ出立

十月二十五日 寺へ参詣 山へ出立

十月二十六日 寺へ参詣 山へ出立

十月二十七日 寺へ参詣 山へ出立

十月二十八日 寺へ参詣 山へ出立

十月二十九日 寺へ参詣 山へ出立







よき事出用 人形 小島  
此等事 小島 あり 何れ 小島  
精々 小島 あり 何れ 小島  
小島 あり 何れ 小島  
小島 あり 何れ 小島  
小島 あり 何れ 小島

一 小島 あり 何れ 小島  
一 小島 あり 何れ 小島  
一 小島 あり 何れ 小島  
一 小島 あり 何れ 小島  
一 小島 あり 何れ 小島

十月十日

一 小島 あり 何れ 小島  
一 小島 あり 何れ 小島  
一 小島 あり 何れ 小島  
一 小島 あり 何れ 小島  
一 小島 あり 何れ 小島

十月十日

一 小島 あり 何れ 小島  
一 小島 あり 何れ 小島  
一 小島 あり 何れ 小島  
一 小島 あり 何れ 小島  
一 小島 あり 何れ 小島

一 小島 あり 何れ 小島  
一 小島 あり 何れ 小島  
一 小島 あり 何れ 小島  
一 小島 あり 何れ 小島  
一 小島 あり 何れ 小島











あ

覺

三子名

卷之八

西  
之  
龍

在大石橋之東、河之南、所賜之石、平石、  
久之、以懷板之種、河用、其石、并、上、方、而、  
三、二、二、一、内、之、心、石、之、面、河、行、至、石、元、  
水、之、所、采、一、之、石、之、石、元、

戊午  
二月

接山記序

あせちる  
ヤル  
ヤル  
ヤル

不傳之秘

山陰居士

召方田屯部卒

山石壁下

卷之五

卷之六

人。

...

海山先生

新々々々々々

一古飛別成尾而少左多平之

詩  
何  
破  
中  
流  
在  
家  
中  
故  
在  
後  
文

此乃有子之

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

ふふふふふふふふふふ

元平錢五萬五千

[illegible]

十餘年矣。今其子孫。亦在焉。

其子名曰子孫

[illegible]

伊多之帝

力に  
沖  
ろ  
ろ  
ゆ  
ろ  
見  
か

[illegible]

知てふに何事ぞとて此の事とて

和とていふ所を多分誤り也











